

「まだ家までは遠かった」の原文を直訳すると「彼がまだ遠く離れていた」となります。原文には「家まで」という言葉は無いのに、なぜ「まだ家までは遠かった」と意識したのでしょうか。それは、ここの「遠い」という言葉が 13 節の「弟息子は・・・遠い国に旅立った」の「遠い」と同じ言葉だったからと思われまふ。ここがもし、「まだ家までは遠かったのに」となれば、父親は家から遠いところまで来ていたこととなります。それは、弟息子を遠くまで探しに来ていたことになるでしょう。父親は、弟息子がどこに行ったのか調べ、その情報を頼りに遠い国まで来ていたのかもしれない。たとえ、原文の直訳であったとしても、弟息子が「まだ遠く離れていたのに」、その弟息子を見つけたのは父親でした。遠くで見つかるはずのないところで見つかったのです。それは、たまたまではありません。ここの主語は、父親です。父親は、いなくなっていた弟息子をずっと探していたのです。「父親は彼を見つけて」とあります。もしかすると落ちぶれた弟息子の姿は、この父親でなければ、それが弟息子であるとは見分けがつかなかったかもしれません。しかし、父親は、弟息子を見つけて、「かわい

そうに思い」とあります。これは、息子の貧相な姿を見てかわいそうだ、仕方がない、受け入れてやろう、というものではありません。息子に対する激しい感情が溢れ出ている様子が見られます。弟息子を見てかわいそうに思ったそのときに、父親の方から走り出し弟息子に駆け寄っていました。そして、息子の首を抱きしめ、口づけをしたといひます。父親は、息子が「私は罪を犯した」と告げる前から、その罪を赦して受け入れている様子が見られます。そして、弟息子は、「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇ひ人の一人にしてください。」と父に言おうとしていたが、実際に弟息子が言った言葉には「雇ひ人の一人にしてください。」という言葉がありません。父親はしもべたちに、「急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。」と言っています。父親は、「雇ひ人の一人にしてください」の言葉を遮り、自分の息子として喜んで受け入れている様子が伺えるのです。

「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」(ローマ人への手紙 2 章 4 節)

放蕩息子の譬えは、罪を赦す神の愛について教えています。父親は、息子が罪を告白する前から、駆け寄って抱きしめ口づけして受け入れました。それは、弟息子が父親に背いた罪を告白することを既に分かっていたからかもしれません。つまり、自分の罪を示され、神の前に告白し、神に立ち返ろうとする人を、神は予

め知っていて、神御自身の方から迎え入れてくださるのです。ここに罪をどこまでも赦してくださる寛大な神の愛があります。この神の寛大さがあるからこそ、私達は神に立ち返ることができるのです。もし、どこまでも罪に対して厳しい神であれば、私達は神に立ち返ることはできないし、罪の解決はありません。

